

コロナ禍における子育て家族の生活と「経済的依存」

—教育・保育施設を利用している家族に対するアンケート調査から—

○北翔大学短期大学部 保田 真希 (008291)

キーワード：ケア・経済的依存・就労

1. 研究目的

育児や介護、介助等の「ケア」は人が生きていく上で不可欠なものであるが、ケアを行うことは、担い手自身も他者や社会保障給付に依存した状態に置かれる(「二次的依存」)。「二次的依存」は、労働市場や家族内においても不利な立場に置かれやすく、DVや貧困のリスクになることが指摘されてきた(Fineman2004; Kittay 1991=2010)。特に、他国に比べて、女性の経済的依存度が高いことが明らかにされている(三具 2018)。しかし、依存の程度や貧困の状態に置かれるリスクの程度には差がある。

そこで、本報告の目的は、コロナ禍の子育て家族の生活場面で「二次的依存」がどのようなあらわれ方をするのかを実証的に検討することである。より具体的には、①子育て家族の生活構造、②新型コロナウイルス感染症によって、仕事やケア、サポート等の生活にどのような影響があったのかについて、アンケート調査の内容を用いて検証していく。

2. 研究の視点および方法

(1) 調査の概要

本調査はX県A市にある38か所全ての教育・保育施設(幼稚園、認可保育所、認定こども園、家庭的保育所、小規模保育所)を利用している家族に対して、アンケート調査を実施した。調査時期は、2021年10月～2021年11月である。各園を通じて、利用している家族に調査の趣旨やQRコードを記載した依頼文を配布し、協力が得られる場合はQRコードを読み取って回答をしてもらう形で実施した。各園から利用している家族(約930名)に配布し、577名から回答が得られた。回収率は約6割である。

本調査は、科学研究費助成事業(若手研究)「地方都市における子育てとDVに関する実証的研究」(研究代表：保田真希、19K13965、2019-2022年)によるものである。

(2) 研究の視点

DVや貧困問題の発生要因の1つに、家族内、特に夫妻間のパワー(権力関係)が不均衡であることが挙げられる。家族内のパワー(権力関係)が平等か否かは、家族員一人一人がどれだけ資源を有しているかによっても規定される。例えば、貨幣の量・収入の違いが夫妻の権力関係を不均衡にする(アーネ・ロマーン 2001)。ケア役割を中心に担うと、労働市場へのアクセスを制限し、低賃金のパートタイム労働に結びつきやすい。ケアの担い手は稼得の機会が減少し、自身が依存せざるを得ない(「二次的依存」)。「二次的依存」はDVや貧困のリスクになりうるが、それ自体では貧困として顕在化しにくい(Lister 2004=2011)。女性の貧困リスクを明らかにするために、カップル内の女性の経済的依存度に焦点をあてた研究によれば、無職や非正規雇用よりは、フルタイムで働くほうがケアの配分や夫妻の権力関係が対等になり、妻の経済的依存度は低いことが明らかにされている(三具

2018)。そこで、本研究は夫妻の働き方によって、ケアの配分やサポートの有無等にどのような特徴があるのかに着目し、検討する。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守している。発表で使用するアンケート調査は北翔大学大学院・北翔大学・北翔大学短期大学部研究倫理審査委員会で承認されたもの(HOKUSHO-UNIV:2021-018)である。各園を通じて、調査の趣旨や概要、断つてもよいこと、データの取り扱い方法などを記載した依頼文を配布した。協力が得られる場合は、依頼文に記載したQRコードを読み取り、アンケートに回答してもらう形で実施した。その際、全て無記名で、メールアドレスも回収しない形にし、協力者の匿名性の保障と個人情報保護を行った。また、本研究に関連して、開示すべきCOI（利益相反）はない。

4. 研究結果

本研究で明らかになったことは、次のとおりである。第1に、結婚・妊娠・出産などによる仕事の変化・仕事の継続性は男女で異なっていた。父親の約8割が「変化なし」の一方で、母親の約半数が結婚・妊娠・出産、パートナーの転勤で退職を経験している。母親の約3割が育児休暇を利用し、正職員を継続していたが、育児休暇を取得した父親は極めて少なかった。第2に、母親がケア役割を中心に担っていた。新型コロナウイルス感染症の影響で外出自粛や休園になった際にも、約7割の家族で母親が家で子どもを見ていた。第3に、自粛期間中は母親の約半数が働いていなかったが、父親の約7割が普段と変わらない勤務体制で働いていた。第4に、家事や育児のサポートは主に祖父母に依拠していた。自粛期間中はサポートが減少し、約3割の家族が誰からもサポートを得ておらず、自身やパートナーのみで対応をしていた。

5. 考察

ケア・仕事・サポートに着目すると、サポートが希薄した状態や、家族の中で家事や育児などのケア役割が母親に偏在化していること等が複合的に重なることで、より女性の非正規雇用化につながっている。夫妻以外で頼れる人がいない・急な預け先が無い状態は、よりケアの担い手が必要となり、普段に家にいる時間が長い母親が中心的に担う構造を生み出していた。また、女性は結婚・妊娠・出産、夫に付き添って地域移動をすることで労働市場からの撤退や非正規雇用化に繋がっていた。つまり、利用できる社会資源・サポートの有無や地域の条件によっても、「二次的依存」を生み出すことにつながる。

<参考文献>①Kittay,Eva Feder.(1991) “Love’s Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency,”Routledge. (=岡野八代・牟田和恵監訳(2010)『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社). ②Fineman Martha Albertson (2004) THE AUTONOMYMYTH:A Theory of Dependency,The New Press. (=梶田信子・速水葉子訳(2009)『ケアの絆—自律神話を超えて—』岩波書店.) ③Lister,Ruth (2004) “Poverty”,Polity Press(=松本伊智朗監訳(2011)『貧困とはなにか—概念・言説・ポリティクス』明石書店). ④三具淳子(2018)『妻の就労で夫婦関係はいかに変化するのか』ミネルヴァ書房. ⑤ユーラン・アーネ、クリスティン・ロマン(2001)『家族に潜む権力—スウェーデン平等社会の理想と現実』日本・スウェーデン家族比較研究会、友子・ハンソン訳、青木書店.